

国際日本学研究科 国際日本学専攻
ポップカルチャー研究領域

修士学位請求論文要旨

高橋留美子の作品における成熟の問題
— 『らんま 1/2』の変身の描写を中心に—

研究背景

マンガには「ラブコメ」と呼ばれるジャンルがある。これは、明確に定義づけられているわけではないが、一般的には少年少女における恋愛を面白おかしく描いた作品群を示している。元々は少女マンガの中で生まれたジャンルであるが、1970年代から1980年代にかけて、少年マンガへと輸入されていった。特に、少年マンガの「ラブコメ」は、1980年代以降、少年マンガ雑誌で必ず1作は連載されているほど、人気を博すジャンルである。

高橋留美子は、1978年に『週刊少年サンデー』にて『勝手なやつら』でデビューした女性マンガ家である。高橋は、同年、同誌にて『うる星やつら』の隔週連載を開始した。『うる星やつら』は、主人公の不運で女好きな諸星あたるが、宇宙からやってきたラムに熱烈に求愛されつつ、コメディを基調とし、学園生活や、SF的な展開を繰り返す作品である。

『うる星やつら』が週刊連載になった同じ年に、小学館より『ビッグコミックスピリッツ』が創刊され、看板作品として高橋の『めぞん一刻』が連載される。高橋は『うる星やつら』と『めぞん一刻』を並行して連載し、1987年に、同時に終了する。この二作品で、高橋は、あだち充と並び、ラブコメの作家として有名になった。

高橋は『うる星やつら』に限らず、その後も『週刊少年サンデー』や、その他の小学館のマンガ雑誌上で活躍を続けている。2013年には、その画業35周年を記念して、インタビューなどを掲載した「るーみっくわーど35～SHOW TIME&ALL STAR～」も発行されている。少年誌で活躍する女性マンガ家としては、先駆けとも言える人物である。

このように、高橋は、少年マンガ誌における「ラブコメ」を作り上げた作家であると同時に、非常に人気を博した存在である。また、女性少年マンガ家の先駆者としても注目すべき作家である。今日における、高橋の作品群の影響力の大きさは無視することができない。本研究では、高橋の作品群の表現、及び物語に注目することによって、その性質を明らかにすることを目的とする。

先行研究

高橋の作品の性質を知るため、まず先行研究をまとめる。特に、日本のポップカルチャーに造詣の深い評論家である宇野常寛は『ゼロ年代の想像力』（2011年、ハヤカワ文庫）の中で、高橋の母性について触れている。彼が言うところによると、高橋の作品には母性の暴力が溢れている。高橋作品には、男性の何らかの欲望と、それを受け入れる母性があることが、先行研究においては前提としてあった。それらが相互に作用し、高橋の作品は物語が繰り返され、閉鎖的になっているのだという。宇野は、そうした先行研究の高橋の評価を受け入れつつ、母性の面に比重を置いて、しかもかなり批判的に論じている。

宇野は、『らんま1/2』について、このように説明している。

物語開始当初は一見、口当たりの良いラブコメ展開の中に、姉の恋人に横恋慕するヒロイン・天道あかねの“高橋ヒロイン”に特有の情念が影をのぞかせる作品だった。

しかし物語序盤でこの三角関係は解消され、あかねが長かった髪を切ること（事実上のキャラクター変更）によってこのモチーフはほぼ消滅し、同作は母性の暴力性をほぼ完璧に隠蔽した「楽園」として、『うる星やつら』を越える長期連載となった¹。

『らんま 1/2』では、連載が開始してすぐに、長い髪を持つヒロインのあかねが髪を切り、ショートカットのキャラクターとなる。宇野はこの点に着目し、高橋があかねの髪を切ることによって、母性の暴力を隠蔽したと指摘している。このことによって、『らんま 1/2』は、前作の『うる星やつら』や『めぞん一刻』のように、繰り返される世界になっていった。その意味で、『らんま 1/2』では成熟を見出すことはできないという。

しかし、果たして本当にそうなのだろうか。宇野の批判を通じ、『らんま 1/2』の位置づけを見直すことができるのではないか。

仮説

『らんま 1/2』は成熟という意味で、非常に重要な作品である。『らんま 1/2』は、宇野が言うように、母性を隠蔽し、成熟の回路をなくした作品ではない。確かに成熟はしていないが、成熟の可能性を描き続けている作品である。ヒロインのあかねは、連載初期に髪型をショートカットに変化する。それと同時に、乱馬の変身が、男の乱馬と女の乱馬とを、キャラ的に区別するように変化する。あかねと乱馬の変身が対応し合い、『らんま 1/2』は、成熟の可能性を描く作品となった。

こうした理由から、「高橋作品の中で、『らんま 1/2』ははじめて成熟の可能性へと挑んだ作品であり、変身はそれを技術的に支える表現である」という仮説を立て、以下の章では、これを検証していく。

『らんま 1/2』について

『らんま 1/2』の物語は、「格闘ラブコメディ」とも称されており、格闘と恋愛がコメディ

¹ 宇野常寛（2011）『ゼロ年代の想像力』ハヤカワ文庫、p.213



図1.早乙女乱馬。上が女、下が男。
『らんま 1/2 メモリアル・ブック』
1996年、小学館、表紙

調で語られている。主人公の早乙女乱馬(図1)は、父親の玄馬と格闘の修行中、中国の奥地にある呪泉郷という呪われた泉に落ちて、水をかぶると女に、お湯をかぶると男に戻るという体質になってしまう。同時に、玄馬は水をかぶるとパンダになる体質になる。

第1のエピソードでは、彼らは日本に戻り、玄馬の旧友である天道早雲のもとを訪れる。天道家には、三姉妹がおり、その中の一人と乱馬が許嫁の関係になることが、玄馬と早雲の間で取り決められていた。初め、乱馬は女の姿で天道家を訪れたため、家族は混乱するが、乱馬の変身を目の当たりにし、事実を受け入れる。そして、天道家の三姉妹の中でも、三女のあかね(図2)が、乱馬の許嫁に決まる。

早乙女親子は、天道家で居候を始める。乱馬は風林館高校に通いだす。天道家や、風林館高校には、乱馬に負けた経験から彼に格闘を挑む者や、乱馬に憧れ熱烈にアプローチをかけてくる者が、日夜訪れる。

あかねは連載当初、整骨院を営む小乃東風に恋をし、髪を長く伸ばしたキャラクターだったが、途中で髪を切られるというアクシデントにより、ショートカットとなる。それとともに、東風への恋を諦める。そして、乱馬と接していくうちに、惹かれていくようになる。

基本的に、登場人物の年齢は変わらず、季節だけが繰り返されていく。



図 2.天道あかね。右が髪を切られる前、左が髪を切られた後。
右、『少年サンデーコミックス らんま 1/2』第1巻、p.23
左、『らんま 1/2 メモリアル・ブック』1996年、小学館、p.2

天道家以外に、よく登場するのは、乱馬と同じように呪泉郷で修行したことによって、変身体質を持ってしまったものたちである。中国の奥地の部族・女傑族出身で、乱馬に恋をして来日したシャンプーは、猫に変身する。乱馬の良きライバルであり、あかねに恋をする響良牙は子豚に変身する。子豚に変身した良牙はあかねから P ちゃんと呼ばれ、可愛がられている。シャンプーを追いかけて、日本へやってきたムースは、アヒルに変身する。

変身しないキャラクターの中で、登場回数が多いのは九能帯刀と久遠寺右京である。九能は、風林館高校での乱馬の先輩にあたる。剣道の達人で、乱馬のライバルの一人だが、女になった乱馬と、あかねに、二股の恋心を抱いている。

右京は、玄馬が早雲と取り決める以前に約束していた乱馬の許嫁である。お好み焼き屋を経営しており、男装して学校へ登校している。

この他にも、たくさんのキャラクターが登場し、格闘や恋愛が盛り上げられていくという物語になっている。

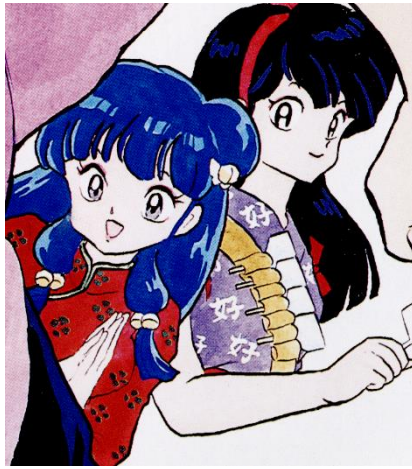


図3.上段左端から響良牙、ムース、シャンプー、久遠寺右京、九能帯刀。

下段、左端からPちゃん、アヒルのムース、猫のシャンプー。

『らんま 1/2 メモリアル・ブック』1996年、小学館、カバー裏表紙

研究結果

第Ⅱ章では、『らんま 1/2』における変身が、実際に別の人物として受容されていたことを、調査によって明らかにする。調査の対象は、当時のアニメ・マンガのファンがよく読んでいた『ファンロード』の読者投稿欄である。この調査によって、『らんま 1/2』において、男乱馬と女らんまは、読者においても区別されていたことが明らかになった。

第Ⅲ章では、現在までのマンガ研究のキャラクター分析を概観し、早乙女乱馬のキャラクター分析を行う。また、マンガ表現の定量的な調査結果を行う。結論として、石岡が指摘するように、確かに連載が続くにつれ、移行形態だけでなく、変身の表現をも省略している。『らんま 1/2』では、男乱馬と女乱馬が同一の登場人物であることを示す手続が省略されていくことができる。とはいえ、四方田が『ひみつのアッコちゃん』で指摘したような、変身したことが理解できる変身のパターンであるコマの挿入が完全になくなったわけではない。男乱馬と女らんまが別の登場人物に見える表現がなされている一方で、同一人物にも捉えられる表現が行われている。

第Ⅳ章では、美少女に関する論を概観した上で、女らんまが美少女キャラクターとして表現されていることを指摘する。ここから、『らんま 1/2』のヒロインの役割の分化、および物語における乱馬にも変化が生じていることを明らかにする。分析の結果、女らんまは、性的な受容に関して、大きな変化があり、美少女キャラクターとして存在している。これに伴い、あかねと乱馬も変化する。あかねは、女らしさや強さを求めるようになり、努力したり悩んだりする様子が描かれる。これは、女らんまが美少女キャラクターとして図像的なヒロインになったことが起因しており、あかねは内面的なヒロインという枠組みを与えられたといえる。そして、物語の中における乱馬は、変身によって男乱馬と女らんまを別のキャラとして描かれる。別のキャラとして変身することによって、様々な格闘へと挑戦し、技を会得していく。連載の後半では、母との関係において、変身による問題が生じ、解消へと向かう。こうした成熟は、「時には別のキャラ人格を持った存在として描き、時には一貫したキャラ人格を持つ同一人物」となる変身を描く表現によって支えられているといえる。

第Ⅴ章では、『らんま 1/2』の結末の考察、高橋の他作品との比較を行い、『らんま 1/2』では成熟は行われていないものの、成長への可能性を常に示し続けている作品であることを証明する。分析の結果、『うる星やつら』と『めぞん一刻』は、相手を縛り、成長や成熟のない閉鎖した世界を作っている。次に、『らんま 1/2』が、成長の可能性を示していることを明らかにした。乱馬とあかねの変化に加え、最終回で、乱馬が告白をする点において、母性とマチズモの縛りをなくそうとしている。最後に、『犬夜叉』と『境界の RINNE』を検討することで、『らんま 1/2』から始まった成熟への動きが、その後も続いていることを明らかにした。『犬夜叉』においては、かごめと犬夜叉の関係は、一層前作を乗り越えるものとなっていた。しかし、まだヒロインの存在は大きい。『境界の RINNE』では、主人公・りんね

とヒロインの桜は、死神業務を通じて互いにサポートし合う。

これらのことを通し、「高橋作品の中で、『らんま 1/2』ははじめて成長の可能性へと挑んだ作品であり、変身はそれを技術的に支える表現である」という仮説を検証した。